

発達障害を持つ子どもを対象としたレジリエンスキャンプの実際

関西大学臨床心理専門職大学院 顯谷美也子

関西大学心理臨床センター 湯浅 龍

関西大学臨床心理専門職大学院 石田 陽彦・川崎 圭三

要約

A市では、発達障害を持つ子どもたちおよびそのきょうだいを対象としたレジリエンスキャンプを毎年実施している。本稿では、2014年度に実施されたレジリエンスキャンプの様子を報告する。子どもたちは1泊2日のキャンプの中で、沢登りやナイトハイクなど、様々なアクティビティに挑戦した。キャンプ中には、子どもたち同士の意見がぶつかるなど様々な問題が起こったが、そういった問題に真正面から向き合う中で子どもたちとスタッフ、そして子どもたち同士の濃い関係性が形成されていった。本キャンプで得られたような達成感や関係性の経験を積み重ねることによって、レジリエンスは少しずつ育まれていくのではないかと考えられた。

キーワード：発達障害、レジリエンス、キャンプ

I. はじめに

A市では、発達障害をもつ子どもに対して、レジリエンスの向上を目的としたキャンプを毎年行っている。レジリエンスとは、「精神的回復力」つまり「心のしなやかさ」のことを指す。本稿では、“困難な状況にあったとしても柔軟にそれに対応し、何とかうまくやっていく力”としたい。川上(2012)は、発達障害を持つ子どもとの関わりを中心軸を「ナマ」と「ライブ」であるとしており、直接的な人間と人間の接触を通して受け止められる関係性の体験感覚が子どもに取り込まれてはじめて、子ども自身を一つの丸ごとの存在として包み込む「外膜」が出来上がっていく、と述べている。キャンプは、子どもたちと24時間行動を共にする。その中では、まさに「ナマ」で「ライブ」な関わりが繰り返し起こり、その結果自然と子どもの中に関係性の体験感覚が生まれていくのである。

また石田(2014)は、レジリエンスキャンプにおいて子どもたちそれぞれが深い人間関係を体験するために大人がすべきエフォートとして、①みんなと仲良く同じことをすることを強要しない、②みんなと同じペースで活動することを強要しない、③子どもが困ったことをしても「ここは叱るところ」と教育的な解釈をして叱ることはしない、④丁寧な言葉の選択をする、⑤絶対に逃げない・離さないで向き合う関わり、という5つを挙げている。筆者らはキャンプの中でこれらのエフォートを常に意識しながら子どもたちに関わることで、子どもが深く濃い関係性を体験し、レジリエンスが育まれていくのではないかという考えのもと、今回のキャンプに臨んだ。また、今年度の参加者は全員昨年度実施されたレジリエンスキャンプに参加していることから、一年前の様子を踏まえた上で継続的な視点を持って子どもたちに関わっていくことが可能となった。

本稿では、2014年度にA市で開かれたレジリエンスキャンプの活動を報告する。なおA市と関西大学は地域連携協定を結んでおり、本キャンプはA市特別支援教育サポート事業として、A市教育相談室と関西大学社会的信頼システム創成センターが共に企画・運営している。

II. 概要

目的：関係性の広がりとは自己評価の向上によるレジリエンス（心のしなやかさ）の育み

参加者：日常生活や学校生活に何らかの困難をもつ小学生～中学生の子ども及びそのきょうだい14名（男子9名、女子5名）

日程：X年8月30日～31日の1泊2日

スタッフ：A市職員、小学校教諭、臨床心理士など計17名が参加した。なお本キャンプにおいては、コーディネーター（CN）、アドバイザー（AV）、スーパーバイザー（SV）、アシスタントディレクター（AD）、マネジメントディレクター（MD）、遊撃、キャンプリーダー（CL）、物品、ピエロの9つの役割があり、スタッフはいずれかの役割に割り振られキャンプ運営に当たった。それぞれの役割の内容を表1に示す。

III. プログラム及びキャンプテーマ

(1) プログラム

2日間の流れを表2に示す。メインとなるアクティビティは沢登り、ナイトハイク、野外炊飯の3つであり、ストーリーの展開に合わせてこれらのプログラムを組み込んでいった。

(2) キャンプテーマ

今年度のキャンプでは“カーニバル”をメインのテーマに据えた。レジリエンスキャンプでは、子どもたちがキャンプの世界に入り込み、主体的にプログラムに参加できるように、毎年何らかのストーリーに沿ってキャンプを展開している。将来子どもたちが成長した際、このキャンプでの出来事を想起するきっかけとなるよう、テーマに合わせたシンボルやマークなどもストーリーの流れの中で提示していく。

(3) ストーリー

ピエロ（写真1）から、参加者の元に『みんなでマジカルカレーを作って、一緒にカーニバルを楽しもう！』というカーニバルへの招待状が届く。しかし参加者が招待状に書かれた場所に到着すると、ピエロの様子がおかしい。どう

表1 キャンプにおける役割

CN	キャンプ全体をコーディネートする役割。A市、参加家族、スタッフ、キャンプ施設など、あらゆる団体をつなぐ。
AV	キャンプに関するアドバイザー。子どもの楽しみ方を熟知しており、山での遊びや過ごし方を指導する。
SV	心理に関するスーパーバイザー。発達障害の特性を理解し、子どもとの関わり方を指導する。
AD	プログラムの進行役。子どもの前に立ち、キャンプ全体を引っ張っていく。子どもたち全員の様子を見ながら、プログラムの微調整を判断する。
MD	全体を見ながら、必要に応じて動き回る裏方。ADと共にプログラム進行に関して判断する。CRや物品の補助に入ることもある。
遊撃	班から出た子どもの対応など、主にCRの補助に入る。
CL	班のリーダー。スタッフの中で最も密に子どもと関わる。班が安全な場となるよう、子どもたちと関係を築いていく。
物品	キャンプの進行上必要となる物品を用意。プログラムに先立って準備に回るため、子どもと関わる機会は少ない。
ピエロ	ストーリーの進行役。キャンプのシンボル。



写真1 ピエロ

表2 キャンププログラム

1日目	2日目
11:00 集合、開会式	6:30 起床
12:20 昼食	7:30 朝の集い
13:00 沢登り	9:30 暗号解読プログラム
17:00 入浴	10:00 野外炊飯
18:00 夕食	12:30 昼食
19:30 ナイトハイク	13:30 閉会式
21:00 就寝	

※保護者には別プログラムを用意

やらカーニバルで使う食材を、散歩の途中で落としてきたらしい。参加者はピエロのお手伝いをこなし、2日目のカーニバル開催を目指す。

IV. キャンプの様子

沢登り

カーニバルで使う鍋を拾いに行っていきたいとピエロから頼まれ、子どもたちは沢登りに向かう。安全のため、子どもはウェットスーツ・ライフジャケット・ヘルメットを着用して沢を登っていった。コースには至る所に岩や穴ぼこ、段差などがあり、子どもたちはおぼつかない足

元の中スタッフの手を借りながらも、彼らのペースで一歩ずつ前に進んでいった。室内にいる時とは打って変わってイキイキとした笑顔を見せる子や、恐怖心からなかなか前に進むことができない子など、子どもたちが川で見せる表情も様々であった。我々スタッフは、無理やり前に進ませるのではなく、子どもたちの恐怖心や昂揚感などの様々な感情と寄り添いながら、子どものペースで進めるように努めた。また、昨年度は水への恐怖心から川に入ることさえできなかった子が、今年度は怖々ながらも川に入り、少しずつ歩みを進めてゴールまでたどり着くといった出来事もあった。スタッフは子どもたちの昨年度の様子も踏まえながら、つながりを持った関わりを行うことを意識した。

ナイトハイク

夜は、前夜祭に使用するアイテムを手に入れるために、暗闇の中を懐中電灯の明かりだけを頼りにハイキングコースを散策した。班ごとに立ち止まって地図を見ながら、子ども同士でこの先進む道の相談をしている姿が印象的であった。ゴールとなる小屋にはピエロが用意したアイテム（光るプレスレット）が置いてあり、子どもたちは目を輝かせながら自分たちの腕にそれをはめていた。その後、前夜祭と称してキャンプファイヤーを行った。沢登りやナイトハイクの疲れからキャンプファイヤー内のミニゲームに参加せずに座り込む子どももいたが、無理に参加させるのではなくスタッフもそれに付き添い、子どものペースで過ごせるように努めた。

暗号解読プログラム

ピエロからの暗号と称して、子どもたちそれぞれに一人ひとつパズルのピースを渡した。すべてのピースを組み合わせるとカーニバルの会場を示す文字が浮かび上がるという仕組みである（写真2）。昨年度はそれぞれの班で1つのパズルを完成させていたが、今年度は班を超えて子ども同士の関係性を展開させていってほしいという想いから、14人全員のピースを組み合わせ始めて文字が浮かび上がるようにした。



写真2 暗号解読プログラム

子どもたちは受け取ったピースを隣の子と合わせたり、足りない部分を持っている子に呼びかけるなどして、主体的にパズルを完成させていた。

野外炊飯

暗号を解読し風船などでカラフルに装飾されたカーニバルの会場に到着すると、ピエロがカーニバルのメインイベントであるマジカルカレーを作ることを提案してくる。最後の仕上げにピエロがマジカルパウダーを振りかけることで、美味しいカレーが出来上がるというのである。子どもたちは班ごとに、まき割りや食材の切り分けなど、分担を話し合いながら進めていった。役割決めの際に子ども同士がトラブルになる場面も見られたが、そのような場面では、子どもが自分自身の気持ちをきちんと言葉にして伝えることが出来るようにスタッフはサポートした。

V. 全体を振り返って

今年度のキャンプでは、前年度からのつながりをもって子どもたちを見ていくことができた

ということが、大きな強みであったように思う。子どもたちも前年度に一度経験しているということもあり、全体を通して比較的自由に思い思いのキャンプを過ごしている印象を受けた。沢登りや野外炊飯をはじめ、キャンプの中には「できた!」という体験を子どもたちが持てるような仕掛けを多く盛り込んだ。沢登りでは、ペースの速い・遅いは様々であったが、高い段差をはしごで登るときなどには立ち止まり、全員で登っている子を応援している姿が見られた。川への恐怖心や、それを乗り越えたときの安心感、達成感など、短い時間の間に子どもたちは多くの感情体験をしたのではないだろうか。また、野外炊飯の際には子ども同士の意見がぶつかる場面もあり、大人と子どもの間だけでなく、子ども同士の間でも濃い関係性が形成されていったようであった。1泊2日のキャンプの中では、子どもたちそれぞれがたくさんの問題にぶち当たる場面があったように思う。そういったときに、大人が答えを提示するのではなく、スタッフと共に子ども自身が考え、悩み、少しずつ前に進んでいる姿をキャンプ中何度も目にした。このような経験の積み重ねによって、子どもたちのレジリエンスは少しずつ育まれていくのではないかと筆者は考える。

VI. 総括

友達に暴力をふるう、指示を聞かない、集団行動が出来ない…それらの行動だけに着目すると、その子たちは“困った子”であるとみなされるであろう。しかし、その子たちは本当に“困った子”としての側面しか持っていないのだろうか。今回のキャンプの中でも、そのような行動を取る子をたびたび目にする機会があった。たとえば他児やスタッフに対して叩く・ものを隠すなどの行動を取ることは、その行動だけを見れば好ましくない行為である。しかし、「なぜ彼・彼女はそのような行動を取るのだろうか」という点に視点を移すと、見えるものはまた違

ってくる。たとえばある子は、相手と遊んでいるつもりが、力の加減が苦手であるために“暴力”と見られてしまうのかもしれない。構ってほしい、遊んでほしいという気持ちを、不器用ながらに表現しているという可能性も考えられる。同様に、集団から外れる子にも、彼らなりの理由が必ず存在すると考えられる。ガヤガヤとした音が嫌だ、虫が気になる、あっちに楽しいものがあるそうさ、など、その理由はその時々によって子ども一人ひとりで異なる。レジリエンスキャンプでは、子どものネガティブな側面に着目し、それを矯正してみんなと同じ行動を求めるのではなく、しっかりと子どもの行動や気持ちの背景にあるものを受け止めながら関わっていく。自分自身をありのまま主張し、それを受け止めてもらえるという経験が子どもたちの中に積み重なっていくことによって、子ども

たちの自尊心や自己効力感の向上にもつながっていくのではないだろうか。子どもたちは、我々が想像するよりも大きな力を持っている。子どもたちの力を最大限活かすことのできる環境を、我々大人は作り上げていかななくてはならない。今後もこのレジリエンスキャンプが、子どもたちの力が発揮される場として継続していくことを期待する。

文献

- 石田陽彦 (2014) 発達障害の子どもたちに、市の教育委員会とKU-RENKAが連携し、自然キャンプを実施する意味について, 社会信頼学, 2.
- 川上範夫 (2012) ウィニコットがひらく豊かな心理臨床—「ほどよい関係性」に基づく実践体験論, 明石書房.